

# 佐佐木博士旧蔵平家物語について

高 橋 貞 一

系の權威に負ふ所があつたのであらうか。

一  
日本古典文学大系の「平家物語」が出版されたのは、昭和三十四年二月である。この年「平家物語」の解説中に、渥美かをる博士は、語り系本として、国学院大学蔵の屋代本を覚一本より先出として、すべての十二卷本平家物語を解説したのである。果してこの説が正しいか否か、多くの異本に徴した論考を見ないのは遺憾といふべきである。筆者は昭和十八年に、「平家物語諸本の研究」に於いて、屋代本の位置を八坂流（城方流）の最も古い伝本の一として、甲類本とし、乙類、丙類（傍系）、丁類と四分類し、又一方流本も覚一本（及び同類本）を最も古い詞章を有するものとして、一方流、八坂流の平曲の流伝を明らかにしたのであるが、他の平家物語研究者には、理会されない所が多い。渥美博士にしても、語り系本として、屋代本と覚一本を同列に取扱ひ、一方流本、八坂流本の区別を意に留めない態度であつた。これでは語りを重なる渥美博士の研究としては矛盾がある。これ以後の研究において、渥美博士の考察が多く信ぜられたのは岩波日本古典大

系に論考する佐々木信綱博士旧蔵の平家物語は、その一部は、「平家物語諸本の研究」中にも述べたのであるが、昭和五十三年十一月、天理図書館善本叢書の第四十五卷、第四十六卷として出版せられ、山下宏明氏の解説があるが、山下氏の解説も渥美博士と同様の見解に立つてゐて、岩波日本古典大系の解説と同じく平家物語研究者に誤つた認識を与へるものであると確認されるので敢てこの論考を述べるのである。

平家物語の語り、所謂平曲は、周知の如く、琵琶法師に二大流派があつて、一方流と八坂流があり、その各にはその伝統がある。又その語る詞章も、その相違があつて、単に文献として存する以外にも、琵琶法師の頭に記憶されて流伝して来たものである。その点は語りものの台本としての性格を考へる上で十分留意すべきである。又その語る語り方も、巻頭より巻末に次第にこれを語るのではなく、琵琶法師の暗誦の順により、又は所望される章段（句）を語つたものである。従つて一定の台本によるといふ統一は困難であつて、新旧の本文の成立と

いつた性格を生むといつてよい。この点、異本研究に於て、流伝を重視せず、単なる語句の差異の比較にのみよる本文批判の行はれる平安文学とは、性格を異にする所がある。多くの平家物語の本文批判をする人が一章二章の僅少の比較によつて新旧を論ずるのは無意味といへよう。前述の如く、渥美博士が屋代本を最古として、覚一本をその後の成立とする説と筆者の覚一本を最古とし、屋代本を八坂流甲類本の一とする説との論も、単に屋代本と覚一本との二本を比較するのみでは証明できない。他の多くの異本がそれによつて説明されて始めて定説となるのである。

## 二

佐々木信綱博士旧蔵の本書は十二巻で、一方流本の如き灌頂巻は存しないが、巻十二の最後、六代被斬の後に、

建礼門院大原御隠并法皇寂光院御幸夏

として、一方流本の灌頂巻の大原入御以後がまとまつてゐる点は、注目すべきことで、かつて玉井幸助先生が、灌頂巻成立階梯本として見たことがあつた。これに就いては後に巻十二の条で詳述することにする。以上の点よりも一方流本でないことは明確であり、巻二と巻三の章段の分割からも八坂流甲類本である。鎌倉本（彰考館文庫蔵）、平松家本（京都大学蔵）、百二十句本（天理図書館、京都府立総合資料館等蔵）、屋代本（国学院大学蔵）と同類本である。従つてこれらの諸本を同時に参照しつつ論を進めるのが正確である。

前述の如く八坂流の平曲の詞章の変化も漸次流動して行つたものと

認められるので、一つの本文の差異も他の異本と共通してゐるものが多く、その異本のみのものと認められるものも、今は伝はらない伝本に共通してゐたかも知れないので、考察は広く詳しくすべきである。次に各巻に就いて述べよう。

## ○巻一

巻頭、「平家巻第一」とありて、平家物語とない点は、八坂流甲類本の特質ともいへよう。その下に、「序 忠盛朝臣昇殿事」とある。序はどこまでをさすか不明であるが、序とある伝本は本書と四部合戦状本のみである。巻一の本文は鎌倉本よりは百二十句本に近く、覚一本とはかなりの差がある。忠盛昇殿事に、

又花山院前太政大臣忠政公未タ十歳ト申せし時、父中納言忠家卿に後奉り、孤ニテ御在ケルヲ、故中御門藤中納言家成卿未幡磨守タリシ時、取賀華色ニ被賞レハ、其モ五節ニハ幡磨米ハ、木賊カ掠ノ葉カ、人ノ綺羅ヲ磋ハトソ被早ケル

とある。これは覚一本、百二十句本等にありて、屋代本にはない。平氏一門繁昌事に、熊野権現御利生の事がない。百二十句本以外の八坂流本にはなく、注目すべき条である。左右近衛大将について、

昔奈良帝ノ御時、天平二年庚午ノ年朝家ニ近衛大将ヲ始テ置ル、以参議民部卿藤原房前、為中衛大将、称徳天皇天平神護元年乙巳歳以参議従三位藤原蔵下丸、為近衛大将、中衛近衛似テ有シヲ、平城天王大同二年丁亥歳四月廿二日ニ、改近衛為左近府、改中衛右近府トス、以右大臣藤原内膳為左近衛大将、元近衛大将也、以中納言坂上田村丸、為右近衛大将、元ハ中衛大将也、去共大同五年

ニ被改中衛ヨリ已往兄弟左右相双事僅三回箇度也

とある。鎌倉本、屋代本にあり、百二十句本になし。白拍子義王仏等事に、仏の語として、

一一物ヲ案スルニ、吾早晚□繫生死繼、可巡浮世苦輪、娑婆ノ榮花ハ小蝶ノ夢ノ榮ミ、今生ノ世俗ハ邯鄲ノ枕ニ同ノ、難解難入ノ御法ノ声、耳ノ盤ニモ遠サカリ、榮ミ榮テ何カセン

とある。他の諸本になく、大山寺本に、

いつまで我しやうじのきづなにつながれて、かくうき世にはめぐるべき

と一部は存し、屋代本にも、

我イツマテ生死ノ木綱ニ被繫天角浮世ニハ可廻、娑婆ノ榮花ハ夢ノ中夢、榮ミ昌ヘテモ何カハセン

とある。本書は特異な増補と認むべきであらう。

最後に

入道仏ヲ失玉イ、諸国七道ニ手ヲ分テ寛ラレケレ共無リ梟、淨海仏ハ一定天狗ニ被捕タリトソ宣ケル、其後遙ニ程経テ聞被出ケレ共、左様ニ世ヲ厭タラン者ヲ、中々兎角語ニ不及トテ、何ノ沙汰モ無リケリ

とあるのも、大山寺本、屋代本にあるが、覚一本、百二十句本にない。屋代本が最も古いものならば他の諸本は省略したと認めなければならぬ。次に二代后事に、則天武后の事がある。覚一本以外の八坂流甲類本にはすべてある。鹿谷謀叛評定事に、

父ノ卿モ纔ニ中納言マテ社至リシカ、其末子ニテ位正二位官大納

佐々木博士旧藏平家物語について

言ニ至テ、大国太多給リ、子息所従トモ、誇期恩ニ、何ノ不足ニ  
嬰兒心付レケン唯天魔ノ所為トソ見エシ

とあるが、百二十句本のみこの語がなく、他の諸本にはある。傍線を付した所は覚一本と異なる所である。次に後二条関白願申事に、

此童權現乗居ラセ給ヒタリト舞乙ツ、サレハ如何ナル事ヲ申共、始終ノ事ハ不叶

とありて、御託宣の詳細な記述がない。一部屋代本と似る所である。かうした記事の有無ばかりでなく、記述の順序の異なるものとして、最後に、

安元三年三月五日、妙音院殿内大臣ニ在梟カ、太政大臣ニ昇ラセ玉フ、大納言貞房卿ヲ越テ、小松殿内大臣ニ成玉フ、妙音院殿押上ラレ給ヘリ、一ノ昇社前途ナレ共父宇治惡太府ノ御憚有

とある。この記事は、覚一本では、鵜川合戦事の前にある。百二十句本はこれに同じ、鎌倉本、屋代本は本書と同じである。日吉神輿入洛事に、頼政の鵠を射る事(二条院御時)がある。これは屋代本と同じである。これらは特に注目せられる所であるが、更に重要なことは、詞章全般の性格である。その一斑として、後二条関白願申事の条を示すと、

頼治カ郎等矢ヲ放ツ、疵ヲ被者八人、矢場ニ死ル者二人、所司社司四方ヘ散ス、門徒ノ大衆、為奏聞子細下洛スト听シカハ、関白殿武士ヲ西坂本ニ差向テ入ラレス、依は大衆七社ノ神輿ヲ鋸リ奉リ、振上根本中堂ニ、真読ノ大般若ヲ誦テ、関白殿ヲ呪咀シ奉ル、大般若畢テ後、結願ノ導師ニハ、忠胤法印未供奉ト申ケル

カ、登高座啓白ノ聲打鳴シ、啓白ノ言ヲ屏キ、吾等カ芥子ノ二葉ヨリ生立奉ル神達、理ヲ非ニ成ノ、吾山ニ怨結玉フ関白殿ニ鎭矢一放チ中玉へ、大八王子権現ト高ラカニ申サレケルカとある。覚一本との差異は傍線の如くである。鎌倉本と同文である。又屋代本も、

頼治か郎等放矢、被疵ヲ者八人、矢庭ニ死ルモノ二人、諸司社司四方へ散ヌ、門徒ノ大衆子細を奏聞ノタメニ下洛スト聞ヘシカハ、関白殿武士ヲ西坂本へ差向テ不入給、因茲大衆七社ノ神輿ヲ奉饗、根本中堂ニ振上テ真読ノ大般若ヲ読テ、関白殿ヲ奉呪咀シ、大般若畢テ後、結願導師ニハ忠胤法印、未胤供奉ト申ケルカ、高座ニ登テ、表白金打鳴シ、理ヲ非ニ成テ我等ニ讎ヲ成給フ関白殿ニ鎭矢一ツ放チ当テ給へ、大八王子権現ト高ラカニソ被申ケル

とあつて殆ど同文である。かく観て来れば、本書は他の鎌倉本百二十句本とも同詞章を有する所が多く、屋代本とも同性格の本文を有する事が明らかである。然らばその前後を如何にといへば、日吉神輿入洛事に、頼政鵠を射る事のあるにより、鎌倉本、百二十句本よりは屋代本に近い伝本といふべきであらうか。

## ○卷二

天台座主被改易事に、

上ニハ日月ノ光ヲ双テ下ニ雲有トソ難シ申ケル。同廿二日前座主既ニ伊豆国エ可被流給ト聞エケレハ

とあるが、△に覚一本、鎌倉本にある詞章が、最後に来て、

中堂ノ宝蔵ニ方一尺ノ箱在、白布ニテ被裹タリ、一生不犯ノ座主、拜堂ノ時、件ノ筥ヲ開テ見ニ、中ニ黄紙ニ書タル文一卷有、是ハ昔伝教大師未来ノ座主ノ御名ヲ兼テ被注置タリ、吾名ノ有ル所迄ハ見テ、其ヨリ奥ヲハ不見、如本巻返ノ被置習有、去ハ仁安元年二月廿日明雲僧正天台座主ニ成玉フテ、件ノ筥ヲ開テ、此文ヲ見ニ、明雲ト云御名有、サレハ凡夫ノシワサニ非、是程目出度人ナレ共、何ナル前世ノ宿習ニテ係ル憂目ヲ見玉フラン

昔大唐ノ一行阿闍梨ハ玄宗皇帝ノ御持僧ニテ御坐ケルカ……とある。かうした一部の語句の順序の相違は琵琶法師の記憶の誤りか、或は故意に改訂したものと認められる。又その詞章も傍線を附した所は覚一本と異り、鎌倉本と同じく八坂流の本文である。百二十句本は覚一本と同文である。従つて鎌倉本の本文の一部が移動したと認むべきであらう。次に蘓武鴈書事に、

余ニ思心ハ此記シ有ニヤ、昔漢皇胡国ヲ被責ケルニ、漢王ノ軍弱ク狄ノ戦強クシテ、味方戦負テ引退ク、先李將軍ヲ始トノ、三十万奇ヲ被遣タリケレハ追立ラル、次テ、蘓武ヲ將軍トノ五十万奇指向ラレケレ共、尚胡国ノ軍強ノ、官軍亦戦負ニケリ、可然者共千余人被囚梟、其中ニ蘓武ヲ始、宗徒者共六十余人勝リ出シ、片足切テ追放

とある。傍線を附した所は覚一本と異なる所で八坂流の本文である。鎌倉本は百二十句と同文である。鎌倉本は、

人ノ思フ心ハ必驗有事ニテヤ、昔漢王胡国ヲ攻給シニ、三十万騎ノ勢ヲ以被攻ケルニ、胡国ノ戦強、漢王軍破レテ皆追返ル、其後

五十万騎ノ勢ヲ遣ル、尚ヲモ胡国強テ、李勝荆ト云大將軍ヲ始トメ、千余人捕シテ胡国ニ留ル、其中ニ蘓武ト云將軍ヲ始テ、宗徒ノ者共六十余人勝リ出テ、巖嶮ニ追籠、三年ヲ経テ彼等ヲ取出シ、片脚ヲ切テ追放ツ

とある。屋代本は、本書と同文である。従つて八坂流本にも二つの本文の流伝があつたと認められる。卷二の最後に、

成親禪門逝去事并彗星事

徳大寺大將支

がある。覚一本は、成親大納言死去と徳大寺巖嶮詣を阿古屋松、三人被流の次に述べるが、八坂流甲類本は、卷二の最後に述べるのは注目すべき所である。この外にも本書の八坂流本としての詞章の特質を示す所として、門脇宰相丹波少将申預事の一節を示せば、

八歳ノ年御所へ参り、自十二歳夜昼御前ニ候テ、朝夕竜顔ニ奉近付、朝恩飽満テ而已罷候ツルニ、如何ナル目ニ可逢ニテ候ヤラシ、今一度御前エ参テ、君ヲモ可奉見候エ共、係ル身ニ罷成テ候へハ、今ハ惶ニ存候ト泣々被申ケレハ、女房達御前ニ参テ、加樣ニ被奏、法皇聞召、サレハ社今朝ノ入道カ使ニ早心得ヌ、此等カ内々謀シ事共ノ早漏ニケルヨト思食ニモ浅猿、サルニテモ今一度御前へ参レトノ御気色也ケレハ、世ハ怖ケレ共、御前ニ被参タリ、法皇少将ヲ御覽セラレテ、御涙ニ咽セ給テ、被仰出旨モナシ、少将モ泪ニ咽テ被申上ヌモナシ、袖ヲ顔ニ推当テ泣々御前ヲ罷出ツ

とある。傍線を附した所は覚一本と異なる所である。鎌倉本と殆ど同文

である。百二十句本は、

八さいのときより御所へまいりはじめ、十二よりあさゆふうがんにちかづきまいらせて、てうおんにのみあきみちてこそさふらひつるに、いまいかなるめにあふべく候やらん、いま御所へもまいり、君をも見まいらせたふ候へども、かゝる身にまかり成て候へば、はゞかりをぞんずるなりとぞ申される、ねうばうたち、いそぎ御ぜんへまいり、此よしをそうせらる、さればこそけさにう道がつかひにはや心えつ、これらがな／＼はかりし事のあらはれぬるにこそ、さるにてもなりつねにこれへと御きしよくありければ、よはおそろしけれども、まいられたり、ほうわう御らんじて、御なみだにむせばせおはします、上よりおほせいでらるゝむねもなし、せうしやうなみだにかきくれて、御ぜんをまかりいづとありて、これ又殆ど同文である。屋代本は、本書と殆ど同文である。これがどうして覚一本の如き本文成立に至るであらうか。八坂流乙類本になると、中院本に、

八さいより御めにかゝり、十二より此御所にしてうつかまつりて、てうせき御ぜんにちかづきまいらせて、なのめならず御いとをしみをかうぶり候つるに、いかなるめにかあひ候はんずらん、大納言うしなはれ候はゞ、なりつねもおなじつみにこそをこなはれ候はんずれ、されば今一ど御ぜんにまいり、君をも見まいらせたく存候へども、かゝる身とまかりなり候ぬるうへは、よにをそれてまかり出候と申されたりければ、女房たち御前にまいり、このよし申されければ、法皇さればこそ、けさぜんもんがもとより

申つるに、はや御心えあり、さるにても今一ど、これへまいれとおほせければ、少将御前へぞまいられける、ほうわうもおほせいださるゝむねもなし、少将も又申しだす事もなし、やゝありて少将、いとま申ていでられければ

とあつて、八坂流本文の伝統は後出の諸本に継承されるのである。

以上によりて卷二は、屋代本に近い八坂流の伝本と認められる。

### ○卷三

目錄に、「法皇於天王寺御灌頂事」とあるに、本文中には、山門学侶塔衆合戦本」の章を設けて、山門滅亡の記事がある。これは覚一本では、卷二の、山門滅亡と善光寺炎上の記事にあたるものである。この章段の相違についても、渥美博士は何もいはないのは遺憾である。但し八坂流本には善光寺炎上を載せない。何か理由があつたのであらう。

高野大塔修理事同巖嶋利生事に、老僧の物語として、

御物語共有テ、昔ヨリ今ニ至マテ、此山ハ密宗ヲ扣テ顯真言ノ奥旨ヲ、持律ヲ専ニ侍慈氏ノ下生、朝ニハ学戒定惠三学、昏ニハ念南無仏一声、況ヤ行儀無退転、淨侶双楼屋ヲ、天下ニ亦モ候ハス、大塔修理社目出度候エ、偕ハ安芸巖嶋越前氣比ノ社ハ兩界ノ垂跡ニテ候カ……

とある。他の八坂流甲類本にはみない語である。又同じ章に、

修理訖テ后、清盛公被参タリケルニ、大明神御託宣有、余知ルヤ忘レリヤ、以弘法云セシ事……

とあつて、小長刀を賜はる事を載せない。覚一本には存する。百二十

句本にはあり、鎌倉本屋代本にはない。

有王嶋渡同僧都逝去事に、有王亀王の二人の童が俊寛に仕へてゐた事は、他の八坂流本と同じく、

如何ニト問ヘハ、猶罪深クテ島ニ被残ヌト听テ、心憂共疎也、恒ハ六波羅ノ辺ニイ聞ケレ共、可有赦免トモ聞エス、僧都ノ娘ノ奈良ノ伯母御前ノ方ニ忍テ在ケル所エ参テ、今度モ漏サセ給候間、如何ニモシテ彼嶋ヘ渡テ、御向後ヲ見参セント思立候、御文給ラント申ケレハ、廳書テソ給ケル

とある。これは覚一本に近い詞章である。鎌倉本も殆ど同一である。百二十句本は、

いかにとふに、しゆんくはんの御ばうは、なをつみふかしとて、しまにのこされぬときゐて、ありわうなみだにぞしづみける、なくくみやこへたちかへり、その夜は六はらのへんにたゝずみて、うかゞひきゝけれども、きゝいだしたる事もなし、なくくわがかたにかへりて、つくづくなげきくらせども、おもひはれたるかたもなし、かくておもへば身もくるし、きかいがしまとかやにたづねくだつて、そうづの御ばうのゆくゑをいま一ど見たてまつらばやとぞ思ひける、ひめ御ぜんのおはしけるところへまゐりて申けるは、きみはこのせにももれさせ給ひて、御のぼりも候はず、いかにもしてわたらせ給ふしまにくだりて、御ゆくゑをたづねまいらせばやとこそおもひたちて候へ、御ふみを給りてまゐり候はんと申ければ、ひめ御ぜんなのめならずによろこび給ひて、やがてかひてぞたびにける

とある。これは屋代本と殆ど同文である。本書の屋代本と異なる所の一つである。又同じ章に、

稍有テ少シ人心地出来扶起シテ、現モ余カ是□ニ下ケル志ノ程神妙也、明暮都耳思、恋キ者共カ化夢ニ見ユル折モ有、幻ニ立時モ有、吾身衰弱テ后、夢モ現モ不分サレハ、余カ来ルモ唯夢ト耳社覺レ、若此事夢ナリセハ、覺テ后如何セン、童現ニテ候、偕モ此有様ニテ今マテ御命延サセ給社、不思議ニ候へ、僧都サレハ社去年少将ヤ判官ニ被捨便ナサ、万心ノ中可推量、其瀬ニ身ヲ投ントセシヲ、少将カ今一度都ノ音信ヲモ待カシト慰置シヲ、拙フ若ヤト頼ミ、永得ントハセシカトモ……

とある。覚一本に近い詞章である。鎌倉本も同じであるが、百二十句本は、

やゝあつてそうづころし人こゝちいできて、たすけおこされ、の給ひけるは、さればよと、こぞせう将やすよりにう道がむかひのときも、そのせに身をもなぐへかりしを……

とあつて、誤脱があると認むべく、屋代本は本書と殆ど同文である。

小松殿熊野参諸事逝去事

には、無文、灯籠の事を載せない。

才芸勝テ詞ニ徳ヲ兼玉ヘリ、天性不思議ノ人ニテ末代ノ事ヲ兼テ覚給ニヤ、惣テ滅罪生善ノ志深フ在シケレハ、吾朝ニハ如何ナル大善根ヲシタリトモ……

とある。鎌倉本と同じ。屋代本も同じ。百二十句本は無文のみはあ

入道相国奉恨朝家事に、

天照太神、春日太明神、和光ノ神慮モ難測、今ハ神路山ノ華モ匂無、岩清水ノ流モ絶々ニ、王道モ衰果、仁秋津洲ノ外ニ不伝、恵筑波山ノ陰淺シテ、忘三皇之古、五帝ノ昔ヲ遂事ナシ、同十五日入道可奉恨朝家事必定ト聞エシカハ……

とあり、傍線を附した所は、他の八坂流本にない所である。本書の増補した語であらう。次に、

碑文ヲ自書テ、彼廟ニ立テ社悲ミ給ナレ、吾朝ニモ親見進セシ事ソカシ、頭頼民部卿力逝去シタリシヲ、故院殊ニ愁悲ミ玉イテ、八幡ノ行幸延引シ、御遊無リキ、惣テ臣下ノ損スルヲハ、代々ノ帝御歎有事ニテ社候へ、其ニ内府カ中陰ニ八幡ノ御幸成テ……

とあり、山下氏の調査表に、この頭頼卿の事がないとなつてゐるのは誤認である。覚一本に比するに、覚一本は、「其ニ内府カ中陰」の前に、

「さればこそ、親よりもなつかしう、子よりもむつまじきは、君と臣との中とは申事にて候らめ、されども」

の語がある。屋代本にこれがあるのは、注目すべく、これは、百二十句本に、

べうにたてゝこそかなしみ給ひけれ、かるがゆへにちゝよりもむつまじく、こよりもしたしきはくんしんのみちなりとこそ申事にて候に、しげもりがちういんのうちに、八はその御かうのあつて御ゆうある

とあるのと関係があらうか。又覚一本の如き一方流本によつて補入せ

られたものか。次に、

八幡へ御幸成テ、御遊有キ、御歎ノ色一事モ是ヲ不見、設入道カ悲ヲ哀ミ不給共、ナト内府カ忠ヲ思食忘サセ可給、縦内府カ忠ヲ忘サセ給フ共、争入道カ悲ヲ御慙ミ可無、偕ハ知ヌ父子共ニ背慙慮ヌル事、於今失面目候、是一、次ニハ越前国ヲハ子々孫々マテモ御変改有マシキ由御約束有給候ヲ、内府ニ後テ后、則被召反候事、何ノ過怠ニテ候ヤラン、是一、次ニ中納言關ノ候シ時、(二位)中將ノ所望候ヲ、入道随分執申シカ共、終ニ無御承引、被成関白之子息事ハ如何、設入道申行非掘共、一度ハナトカ可不入聞召、申候ハンヤ、家嫡ト云、位階ト云、理運左右ニ及ヌ事ヲ引違サセ給フ、本意ナキ御計ト社存候へ、是一、次ニ新大納言成親卿以下、鹿谷ニ会合ノ、謀叛ヲ企シ事、非私之計略、併君之依御許容也、今日カシキ申事ナレ共、七代マテハ一門ヲハ争カ捨サセ可給、夫ニ入道七旬ノ齡余命不幾、一期ノ中ニタニモ、動レハ一家ヲ亡サルヘキ由御計候、申ンヤ子孫相統ノ朝家ニ召仕ン事難有、凡老テ子ニ後ルハ枯木ノ枝無ニ不異、今程無キ浮世ニ心ヲ費ノモ何カセン、今ハ何ニテモ有ナント思成テ候ト、且ハ腹立シ且ハ落涙シ玉ヘハ、法印恐フモ亦哀ニモ覺テ汗水ニソ被成ケル

とある。覺一本と殆ど同文である。然るに鎌倉本、百二十句本はこれと異なる詞章である。屋代本は、本書と同文と認められる。以上によつてこの巻は鎌倉本に近い伝本といふべきであらうか。

# ○卷四

安徳天皇踐祚事に、弁内侍事なく、高倉上皇の敵島御幸の記事が簡

略である。

札シカリシ儀式一モナシ、今日ハ唯夢ト而已ソ思食ス、供奉ノ人々ニハ前右大将宗盛……君臣悉感涙ヲソ流シ玉イケル、神主佐伯景公、座主尊榮被成法眼、神慮モ動キ、太政入道モ心揺キヌ覽トソ見エシ、同四月五日、上皇還御ノ次ニ、入道ノ福原ノ別業ニ入セ玉フ、相国禪門ノ孫、越前少將資盛、四位ヨリ上ストソ聞エシ、同入道ノ養子丹波守清邦叙正五位下、同八日洛ヘ入セ玉フ、御迎ノ公卿殿上人鳥羽ノ草津ヘソ被參ケル

とあり、鎌倉本よりも簡である。屋代本は卷四を欠くので明らかにし難いが、この高倉院御幸の記事は注目すべき所である。百二十句本のみは覺一本と同文である。

高倉宮御謀叛事は、最後、

木曾冠者ハ甥ナレハ取セントテ山道ニ社趣ケル

とある。次に覺一本には、熊野別当湛増の事があるが、本書にはなく、鎌倉本にもなく、更に大山寺本、平松家本にもなく、八坂流本の共通の性格である。

伊豆守仲綱馬事に、競の事を述べて、

切府ノ矢負ヒ滝口カ骨法忘シトヤ、鷹羽作タリケルの矢差添、鎗ニ火懸テ、南廷ニ打乗乗替一騎具シ、舍人男ニ楯脇挾セ、三井寺ヘコソ馳參レ、去程ニ六波羅ニハ焼亡有ト非次メキケリ、火本ハ焉ソト尋ルニ、滝口カ家ニテ候ト申、宗盛不安付レニケリ、追懸テ討ト宣ケレトモ、競ハ強弓精兵大力ノ甲ノ者也ケレハ、廿四ノ矢ニテ廿四人ハ射殺レント、吾向ハント云物一人モ無、競ハ六波



羅ヨリ追懸ル者アラハ、一矢射ントテ整エタタ歩セケル、三井寺ニハ只今シモ競カ沙汰有、渡辺ノ親キ者共モ、競ヲ召具スヘウ候者ヲ、唯今六波羅ニテ如何ナル目ニカ合候ラント申ケレハ、頼政ハ競カ心ヲ知テ、世モ其者無体ニ捕レテ六波羅ニハ留ラシ、唯今参ランスルソ見ヨト宣果ネハ、競ツト参タリ、渡辺ノ者共ヲソ恨ケル、ナト角共告知セ打列サリケルソト申セハ、吾々荐ニ知セ候ハント申セハ、伊豆守殿、競ハ六波羅裏檜牆ノ内ナレハ、此事平家ニ知レナン、競ハ打捨タリ共、何十万騎力中ヲモ打破テ参ンスルソト仰ノ有ツルハ、我等モ力及ハス

とある。鎌倉本と同文である。百二十句本と甚しく異なる所である。傍線を附した所は覚一本と異なる所である。屋代本は巻四を欠くので不明であるが、八坂流乙類本の中院本を示せば、

大中ぐろの矢、かしらだかにおうたりけるが、たきぐちのこはうわすれじとて、たかのはにてはいだりける、まとや一てぞさしそへたる、ぬりごめどうのゆみのま中とて、たまはりつるなんちやうにのり、のりかへ一きめしぐして、とねりをとこに、手たてわきにはさませて、やかた／＼に火かけ、むちをあげ、三井寺へぞはせまいりける、平家のさぶらひ共、せう／＼しりたりけれ共、とどめんといふもの一人もなかりけり、きをふがやかたに、せうまうありと、さうどうしけり、右大しやうきをふはとの給へば、候はずとこそ申けれ、あはやきやつにだしぬかれつるこそやすからね、しやつとどめよとの給へ共、とどめむといふもの一人もなし、三井寺にはたゞいまも、きをふがさたありけり、さるにても

きをふはいかになりつらん、めしぐせらるべう候つる物をと、くち／＼に申ければ、三位入道、日ごろ心やしり給けん、さりともしふかひなく、とらへからめらるゝ事はよもあらじ、たゞいままいらんずるものと、の給もはてねば、きをふむちをあげてまいりたり

とあり、覚一本に近い詞章である。これは八坂流の本文の存在の外に、一方流の本文が対立して存在し、そのために一方流の本文に流動したもの認められようか。とすれば、一方流本文と八坂流本文との交流が存在したと認められよう。

宇治橋平等院合戦事付宮頼政取後に、

先陣百四五十騎押落サレテ水ニ溺レテ失ニ梟、其后ハ源平橋ノ両方ノ爪ニ打立テ矢合ス、宮ノ御方ニハ、三井寺ノ大矢俊長、渡辺競瀧口、与右馬允、統ノ源太清進カ射ケル矢ソ、楯モ潜ヌ鎧モ不懸射徹、物ニモ健ニ中ケル、大將三位頼政ハ、長絹直垂ニ品革威ノ介著テ、今日ヲ最后トヤ思シケン、態甲ヲハ着玉ハス、嫡子伊豆守仲綱ハ、赤地錦ノ直垂ニ、黒糸綴ノ介著テ、弓ヲ強彎ントテ、是モ甲ハ著給ハス、去程ニ五智院但馬トテ、打物取テハ鬼ニモ神ニモ合ント云悪僧有、節繩目ノ鎧ニ三枚甲ノ緒ヲ緘、大長刀取持、橋ノ上ニソ進タル、橋ハ引タリ、敵ハ遠シ、可羅様モ勿リ梟、長刀ノ鞘ヲ迦テ立タリケレハ、平家ノ方ヨリ、アレ射取ヤトテ、鏃ヲ揃テ散々ニ射ル

とある。鎌倉本と同文である。百二十句本とは甚しく異なる。傍線を附した所は覚一本と異なる所である。

頼政射變化者事に、近衛院の時の鵠を射る事を述べた後に、

獅子王ヲ給テ罷出ヌ、上皇無限有観感、紅ノ御衣ヲ当座ニ肩ニ掛ラレテ、於此勸賞官位モ關国モ猶飽足シ、誠ヤラン頼政ハ藤壺ノ菖蒲ニ心ヲ懸テ、堪ヌ思ニ臥沈ナル、今夜ノ勸賞ニハ被下此菖蒲ヘシ、但此女頼政音ニノミ听テ未タ目ニハ見サリシカハ、同様ナル女房ヲ太多出メ、引煩ハ、アヤメモ知ヌ恋ヲスル哉ト笑ハンスルト被仰テ、后宮三千ノ侍女ノ中ヨリ中々髷ナル気色モ無ク、金沙ノ羅ノ中ニソ被措ケル、偕頼政ヲ被召清涼殿之孫廂ヘ、主殿司ヲ御使ニテ、今夕ノ勸賞ニハ浅香ノ沼ノ菖蒲ヲ可下サル、手ハ弱ク共自引テ吾宿ノ妻トナセトソ仰ケル（中略）

五月雨ニ沢辺ノ葦水越テ何レ菖蒲ト引ソ煩フ

トソ読タリケル、于時関白殿余ニ感ニ堪兼テ自立テ菖蒲前ノ手ヲ引、是社汝カ宿ノ妻ヨトテ被下頼政ニソケル

とあつて、他の諸本と異なる所がある。鎌倉本は覚一本と殆ど同文である。百二十句本も同様である。これについて注目せられるのは、太平記巻二十一、塩谷判官讒死事に、高武蔵守師直が違例の時、或夜、覚一検校と真城とがつれ平家を語つた事を述べ、菖蒲前の事が出て来る。神田本の本文によれば、

上皇限りなく観感あつて、この勸賞には官位も封国も猶充つるに足らず、誠やらん頼政は藤壺の菖蒲に心を懸けて、堪へぬ思ひに沈むなる、今夜の勸賞にはこの菖蒲を頼政に下さるべし、但しこの女をば頼政音にのみ聞いて、未だ見参せざれば、同じ様なる女を数多出して、引き煩はば、あやめも知らぬ恋もするかなと笑は

んずるぞと仰せられて、後宮三千の侍女の中より……

とあつて、本書の詞章と殆ど同一といつてもよい。覚一は一方流の検校、真城は城方流（八坂流）で、両方がこの様な八坂流の詞章を語つたことは注目すべきであり、且つ覚一の平曲の一端を示す好例であらう。さてこの菖蒲前事は、源平盛衰記巻十六、菖蒲前事にもとづくものである。盛衰記の文と本書との間には詞章の一致する所は殆どないので、本書が盛衰記によりて書かれたとしても全く新しい詞章で、太平記は本書によりて書かれたことが明白である。

以上、この巻は鎌倉本に近い伝本であるが頼政菖蒲前事がその最も注目すべき特質である。

#### ○巻五

福原都遷事は、覚一本と記述の順序が同じく、鎌倉本、平松家本も同様である。百二十句本のみが異なる。

徳大寺旧都月看事付待宵小侍従事には、後徳大寺実定の上洛の条に、

八月十日余ニ、福原ヨリソ被上ケル、道終名所々々ノ月ヲ見ル、

雀松原三影松、雲ヨリ落ル布洩ハ月ニヤ取曝スラン、昆野松原芥川月ノ桂ノ川船ヤ渡セル袖モ希成臬、同十五日旧都ニ着給フ

とある。八坂流本文の一特徴である。鎌倉本、百二十句本は覚一本と同じ、屋代本も、覚一本に同じ、八坂流乙類本には本書に似た文がある。

新院殿嶋御幸事并願文が小松権亮少将東国発向事の前にあつて、覚一本と記事の順序が異なる所がある。

其比新院九月廿二日亦嚴嶋へ御幸ナル、御供ニハ前右大將宗盛、  
五条大納言邦綱、藤大納言実国、六角右兵衛督家通、殿上人ニハ  
頭中將重衡、宮内少輔宗範、安芸守有綱トソ聞エシ、去三月ニモ  
御幸有キ、其故ニヤ、一兩月ノ程ハ代モ鎮テ、法皇モ鳥羽殿ヨリ  
還御有シカ、去五月高倉宮ノ御事ヨリ打次キ静リヤラス、逆乱之  
前表類ニ示シ、地妖常ニ怠慢無ク朝廷閑ナラサリシカハ、特ニハ  
又天下静謐ノ御祈念、別テハ聖体不予ノ御祈禱ノ為也……  
とあり、覺一本に比して詳細である。鎌倉本、百二十句本も本書と同  
文である。屋代本も本文中になく、抜書七ヶ条の中にあるが、詞章は  
本書と同一である。八坂流の本文として注目すべきである。

新都大嘗会事は、

同十一月十三日福原ニハ内裏造立ノ、主上御遷幸有、大内ノ北野

ニ造齋所、調神服神供……

とありて、百二十句本と異なるが、覺一本とも異なる所がある。鎌倉本と  
同文である。

南都滅亡事に、

大衆ノ中ニ坂四郎榮覺ト云惡僧有、打物取テモ弓矢ヲ取テモ、力  
ノ強サモ、戰場ニ臨ム度毎ニ敵ニ当ル事、樊噲張良カ得タル道ヲ  
得タリ、馬ニ乗テ惡所岩石ヲ落ス事神變ヲ得タルカ如シ、只巢父  
之御術ヲ取テ千里ヲ馳セ、水練ハ憑夷カ道ヲ得、驪龍領下ノ玉ヲ  
モ奪ツヘク、弓ハ養由之迹ヲ追シカハ、弦ヲ鳴ノ遙ニ樹頭ノ抛猿  
ヲ落シツヘシ、謀工ニノ心タユマサリシカハ、七大寺十五大寺ニ  
勝レタリ

佐々木博士旧蔵平家物語について

とある。傍線を附した所は他本に見ない所である。

以上によりて本書は鎌倉本に近い伝本で、若干の増補を含むもので  
ある。又百二十句本とも近接する本文を有する。

○卷六

巻頭の、花林院僧正栄円逝去事に、

治承五月正月一日、新玉ノ年立版タレトモ、内裏ニハ、東国ノ兵  
革南都ノ火災ニ依テ、被止朝拜、主上出御モナシ、物音モ不吹  
鳴、舞楽モ不奏、吉野ノ国栖モ不参、二日殿上ノ宴醉モナシ、男  
女打ヒソメキ、禁中不楽ソ成ニケル、同四日南都ノ僧綱闕官シ  
テ、被停公請被没収所職、興福寺別当華林院僧正栄円ハ、仏像經  
卷ノ煙ト登ルヲ見給テ、穴浅益ト被思ケルヨリ病付テ、無幾程失  
ラレヌ、天性此僧正ハ情深人ニテ、或時郭公ノ鳴ヲ聞テ

聞タヒニ珍シケレハ郭公イツモ初音ノ心チ社スレ

ト  
カハ、南都ハ併滅ヒヌルニ社、衆徒ハ皆若モ老タルモ、或ハ焼殺  
サレ、或ハ射殺サレテ、残ル所ハ皆山林ニ交テ……

とある。覺一本に比して簡約である。鎌倉本は覺一本と殆ど同文であ  
る。本書は百二十句本とも異り、屋代本と同文である。

次に、高倉上皇崩御事も、

治承五年正月十四日、六波羅池殿ニテ上皇終ニ崩御成ス、聽テ其  
夜東山ノ麓青巖寺ニ渡シ奉ル、御年僅廿一、内ニハ五戒ヲ持テ、  
慈悲ヲ先トシ、外ニハ五常ヲ不乱、礼儀ヲ直シクセサセ給テ、  
末代ノ賢王ニテ渡ラセ給ツル物ヲトテ、世ノ惜ミ奉ル事不斜、

恐クハ延喜天曆ノ御門ト申共、是ニハ争増ラセ可給トソ時ノ人申合レケル

とある。覚一本、鎌倉本、百二十句本に比して極めて簡略である。これ又屋代本と同文である。

木曾冠者義仲於信州謀叛事に、

漸々長ナル儘ニハ、武略ノ心猛クシテ、弓馬ノ道勝レタリ、常ハ如何ニモシテ、平家ヲ滅シ、世ヲ取ハヤナトソ申ケル、兼遠大ニ悦ヒ、カク仰ラレ候社、誠ニハ幡殿ノ御末トハ覺サセ玉ヘト申ケレハ、木曾意取猛ク成テ、根井太郎太、滋野行近ヲ始トメ、国中ノ兵ヲ語ニ一人モ背ハ無リケリ

とあり、木曾元服の事なく、屋代本と同文である。入道浄海痛患事同被薨事に、額入道西寂の事なく、入道の病状に就いて、

只宣事トテハアタノト計也、只事共不覺、北方二位殿ヲ初奉リ、一門ノ人々御前ニ双居テ夜昼只泣ヨリ他ノ事ソナキ、金銀七宝鎧甲馬鞍弓矢太刀刀ニ至ルマテ、靈仏靈社ニ抛テ祈申ケレ共無驗、或夜二位殿ノ夢ニ見給ヘル事ソ不思議ナル……

とある。覚一本、鎌倉本、百二十句本と異り、屋代本と同文である。

又同章の最後は、

骨ヲハ円実法眼頸ニ掛テ、福原ニ下テ經嶋ニソ納ケル、人ノ失タル跡ニハ、何ナル恠ノ者モ、朝夕ニ鐘打鳴シ、例時懺法説事ハ常ノ習ナルニ、是ハ左社入道ノ遺言ナランカラニ、供仏施僧ノ営ト云事モナシ、只明テモ暮テモ軍合戦ノ謀ヨリ外ハ無他事、最後ノ病ノ有様社心憂レ共、更ニ唯人ニテハ無リ梟ト覺ル事而已多カ

リケリ、何ヨリモ福原ノ經嶋築テ至今上下往来ノ船ノ無煩社目出ケレ、經嶋ト申ハ、石面ニ一切経ヲ書テ築レタリケル故ニ社經嶋トハ申ケレ、太方敬神祇崇仏法玉フ事モ人ニハ勝レ玉ヘリ

とある。これも覚一本、鎌倉本、百二十句本に比して簡であり、屋代本と同文である。

慈心房尊恵炎魔庁屈請事

清盛誕生事(祇園女御)

の順序で、百二十句本とは順序が逆であるが、この方が覚一本の順である。慈心房の事も屋代本と殆ど同文である。次に、流沙惹嶺事(宗論)がある。百二十句本とも殆ど同文であり、屋代本に一致する。五条大納言邦綱逝去事には、

助務僧都見之、三衣宮ノ中ヨリ烏帽子ヲ一取出シテ奉給ケリ、希代ノ用意ト末代マテモ申伝タリ、只今邦綱ノ高名夫ニ不劣トソ人申ケル、其後中納言マテ上給

とあり、百二十句本と異り、屋代本に一致する、又同章の最後に、

彼邦綱卿差ル文才麗ハ御在サリシカ共、サカノシキ人ニテ加様ノ事ヲモ聞答ラレケルニヤ

とあり、覚一本にある邦綱の母の夢の事がない。鎌倉本、百二十句本は覚一本に同じ、屋代本は本書に同じく存しない。次に須俣川合戦事にも、

平家ハ三万余騎ニテ川ヨリ西ニ宿ス、源平互ニ河ヲ隔テ支タリ、源氏無勢成ケレハ、謀ト覺テ、同十六日ノ夜ニ入テ、七千余奇河ヲ渡ヒテ平家ノ大勢ノ中ニヲメイテ懸入、寅刻ニ矢合シテ、夜ノ

明ルマテ散々ニ社戦ケレ、去共夜明テ後、御方ハ多勢也、敵ハ無勢也ト見テ、或ハ馬物具ノヌレタルヲ注ニシ、或ハ白驥付タル物ヲハ敵ト知テ、大勢ノ中ニ取籠一人モ不洩打取ヤトテ、喚叫テ戦ケリ、十郎藏人散々ニ懸散サレ、家子郎等多討取ル、卿公延清深入シテ討死ス、行家希有ニノ命活テ、河ヨリ東ヘ引退ク、……

(中略) 平家統テ攻玉ハ、

とあり、覚一本と異り、屋代本に同じ、城太郎頼死事には、

同七月十四日改元有テ養和ト号ス、筑後守貞能筑前肥後両(国ヲ)給テ、鎮西ノ謀反平ケンカ為ニ西国ヘ発向ス、其日亦非常大赦被行、去治承三年ニ流サレ給シ人々皆被召帰、松殿入道殿下、備前国ヨリ上セ玉フ……(中略) 木曾路川ト謳レケルソ、時ニ取テノ高名ナル

平家祈不成就事

同八月六日将門追討例トテ……

とある。覚一本、鎌倉本、百二十句本等に略同文であるが、屋代本は、

同七月十四日改元有テ養和ト号ス、肥後守貞能鎮西謀反平ケンカ為ニ、既ニ其日門出ス、同八月七日将門追討例トテ……

とあつて、簡略である。これは屋代本が脱漏したと認むべきであらう。一方流八坂流の本文の差のあることは、屋代本の脱漏とするのが自然であり、巻五の詞章の誤脱とも合せて考察すれば、屋代本の、誤脱は他にも極めて多いのである。巻六の最後は、

宗盛内大臣従一位事

同十月三日前右大将宗盛大納言ニ成返テ、同七日任内大臣従一位、聽テ兵杖ヲ賜テ、同十三日悦申有ケリ、当家他家ノ公卿十三人扈從セラル、藏人頭以下殿上人十六人前驅ス、吾不劣シト面々ニ綺羅メキ給シ儀式華ヤカ也、東国北国ノ源氏共ハ如蜂起合、既責上ルト云ニ、浪ノ立ヤラン風ノ吹ヤランモ不知躰(ニテ)、斯

□アリシ消息トモ似氣ナウソ見エケル、東山東海南海西海悉背テ

四夷八蛮都ヲ伺近、往還ノ道モ塞、洛中ノ貴賤只如小水ノ魚、危

乍モ年越テ寿永モ二年ニ成ニケリ

とある。傍線を附した所が他本と異なる所である。以上によりて、この巻は殆ど屋代本と同文であるが、城太郎頼死事の次の松殿、妙音院等の帰洛の事を屋代本が脱漏してゐる点などよりして、屋代本以前の本文を示す伝本と認むべきであらう。

○巻七

巻頭に、朝覲行幸事があるのは、八坂流諸本の特質であり、覚一本及び一方流諸本と分割を異にする所である。北国討手発向事の次に、皇后宮亮経正并竹生嶋参詣事があるのは、百二十句本が巻五、富士川合戦事の前に述べるのと異なるが、他の覚一本、鎌倉本は本書と同じく、巻七に述べる。これは巻七にあるのが前後の関係からも自然である。

木曾義仲於垣生若宮願書事に、

木曾殿宣ケルハ、平家ハ大勢ニテ山打越テ下ル也、黒坂岨松長野柳原採子森ノ広ミニ出物ナラハ馳合ノ合戦ニテソ有ンスラン、但シ馳合ノ合戦ハ如何ニモ勢ノ多少ニヨル事也、大勢勢<sup>カサ</sup>ニ被懸テハ

叶マシ、搦手ヲ回ヤトテ、楯六郎親忠七千余奇ニテ北黒坂へ回ル、仁科高梨山田次郎七千余奇ニテ南黒坂エ向、我身ハ大手ヨリ一万余奇、亦一万余奇ヲハ組松長野楊原ニ引隠シ、今井四郎兼平六千余奇ニテ鷺瀬ヲ打渡メ、日宮林ニ陣ヲ取、木曾宣ケルハ……とあり、覚一本と甚しく異り、百二十句本、屋代本と同文である。鎌倉本は覚一本に同じ。齊藤別当実盛討死の章では、

同廿三日ノ卯尅ニ源氏篠原へ押寄テ、午尅マテ戦ケリ、四時ニ破ケル合戦ニ、源氏ノ兵モ一千余人討レヌ、平家ノ方ニハ高橋判官長綱ヲ始トメ、二千余人ソ亡ニケル、平(家)篠原ヲモ攻落サレテ落行ケリ、其中ニ武藏三郎左衛門有国、長井齊藤別当実盛ハ大勢ニ離レテ二奇列テ引返々々テソ戦ケル、三郎左衛門者敵ニ馬ノ腹ヲ射サセテ頻ニ驛レハ、弓杖突テ下立タリ、敵ノ中ニ被取込、散々ニ射、矢種尽ケレハ打物ヲ抜テ戦ケルカ、矢七八被射立テ立死ニ社死ニケレ、二奇ツレテ引返シタル武藏三郎左衛門ハ討レテ……

とあり、覚一本に比して極めて簡略である。百二十句本、屋代本も又同じ。

木曾義仲山門牒状事并返牒事に、

六月一日、木曾ハ越前国府ニ着テ、有合戦ノ評定、井上九郎、高梨冠者、山田次郎、仁科次郎、長瀬判官代、梶妻判官、樋口次郎、今井四郎、楯六郎、根井小弥太以下、可然者数百人双居タル、木曾宣ケルハ……

とあり、覚一本にはない語がある。百二十句本、屋代本にはある。鎌

倉本にもあるが、前後の文より、鎌倉本は補入したものであらう。平家連署に平家の人々の連名がなく、

謹上座主僧正御坊トソ被書タル、山王大師垂憐、三千大衆致合力ト也

とあつて、願書のたまきの上巻の歌がない。百二十句本にあるが、屋代本にはない。今上西国行幸事に記事の順序の覚一本、百二十句本等と異なる所(摂政都落事)がある。薩摩守忠度都落事の次に、経正都落、青山沙汰がない。屋代本に同じ、

三位中将維盛都落事に、

是ハ去五月北国篠原ニテ討レシ長井齊藤別当実盛カ子共也、是等惟盛ノ馬ノ左右ノ七寸ニ取付、何土マテモ御供可仕由ヲ申ス、中将是等ニ痛フ慕レテ、多ノ者共ノ中ニ、汝ヲ留ルハ思様カ有テ留ラント可思、如何ナラン末ノ代マテモ六代カ便トハ汝等兄弟社可成物ヨト見所ノ有ハ留ソ、滞タランハ供シタルヨリ猶吉ト不思哉ト宣ハ、不及力ニ、若君姫君大床へ出テ喚呼玉イケル御声ノ門ノ外マテ听エケレハ、惟盛モ馬ヲハ進不給……

とある。覚一本と甚しく異なる所である。百二十句本、屋代本と同類である。

肥後守貞能京取還事に、

小松殿ノ御墓所ニ参、源氏ノ馬ノ蹄ニ掛シトテ、御死骸掘起シ、生タル人ニ向テ物ヲ云様ニ、君ハ係ラン世ヲ兼テ知食テ先立給ケリ、貞能モ其時御供不申ソ、無由浮世ニ泳ヘテ、今係ル憂目ヲ見候社口惜候ヘト申、泪ヲ流、其後直香ノ土ヲ鴨川エ流シ、骨ヲハ

高野エ送り、世中憑シカラス思切テ、勢ヲハ小松殿ノ公達ノ御方  
ニ奉、吾身ハ乗替一奇具ノ宇都宮ニ打列テ、平家ト後合ニ東国へ  
社落行ケレ（山下氏見落す）

とある。覚一本と甚しく異なる所である。百二十句本は、

こまつ殿のはかほりおこし、あたりのつちかもがはにながさせ、  
こつをばかうやへをくり、よの中たのもしからずとおもひければ  
……

とある。屋代本は百二十句本に同じ。

以上によりて、巻七は百二十句本に近く、屋代本にも近い伝本であ  
る。両者の中間に位置する伝本と認むべきであらうか。

### ○巻八

法皇自比叡山還御事、義仲行家院参の条に、

義仲行家ヲ召、木曾ハ赤地錦ノ直垂ニ、緋綴鎧着テ、金造ノ太刀  
ヲ帶、廿四差タル大中黒ノ矢負塗籠簾ノ（弓）脇ニ挟ミ、胄ヲ脱  
高紐ニ掛テ跪テ候臬、十郎藏人行家ハ紺地ノ錦ノ直垂ニ黒糸威ノ  
鎧キテ跪テソ候ケル

とある。覚一本と全く異なる所である。鎌倉本は覚一本に同じ。百二十  
句本は、

かげのこうぢの中なごんつねふさ、三人あんのてん上のすのこに  
候ひて、ゆきあよしなかをめして、さきのない大じんむねもりの  
げの平家の一のいついばつすべきむねおほせくださる

屋代本も略同文である。行家義仲の装束については述べない。参考  
に他の諸本についてみるに、

佐々木博士旧蔵平家物語について

緒方三郎維義事に、

女重テ申ケルハ、此比日ノ好ミ奈テカ可忘、互ニ姿ヲ見モシ見エ  
ントイハレテ、去ハトテ岩屋ノ中ヨリ伏堅ハ五六尺計、跡枕ハ十  
四五丈モ有ラント覚タル大蛇ノ動揺シテ社蚊出タレ、女是ヲ見  
テ、肝魂モ身ニ不副、狩衣ノ頸上ニ差ト思ツル針ヲハ即大蛇ノ唯  
唇ニ社差タリケレ、女ノ具シタル所従等十余人倒不佗咄喚叫テ逃  
去ヌ、女婦テ後程無産ヲ為タリケレハ男ニテ有ケリ、母方ノ祖父  
大太夫育テ見ントテ、生長ケリ、未十歳ニ満サルニ、勢大ニ顔長  
ク長高カリケリ、七歳ニテ元服サセ、母方ノ祖父ヲ大太夫ト云  
間、是ヲハ大太トソ名付タリケル

とある。覚一本鎌倉本と同文である。百二十句本、屋代本はこれと異  
る詞章である。妖尾太郎兼康討死事も、覚一本に近く、百二十句本、  
屋代本と異なる。屋代本を示せば、

義仲	行家		屋代本
	黒革威	褐色鎧直垂	長門本卷十四 盛衰記卷三十二 覚一本卷八
赤地錦直垂	同毛鎧	縫物紺直垂	紺地錦直垂
唐綾をとし	赤地錦直垂 塗籠箭 蒔劔	火おどし鎧	かがね作りの太
黒革威鎧	赤地錦直垂 唐綾威鎧	大中黒矢	ぬりごめ簾弓
滋簾の弓	いか物造り太刀 きりふの矢	なし	なし

木曾聞之、一万余騎ニテ馳下ル、爰ニ平家ノ侍ニ聞ル兵、備中国住人妹尾太郎兼康ハ、去ル五月ニ砥並山ニテ生虜ニセラレタリシヲ、聞ル甲ノ者ナレハトテ、木曾惜テ不切、加賀国住人倉光三郎成澄ニ被預タリケルカ、妹尾預リノ倉光ニ申ケルハ、木曾殿山陽道ヘ御下ト承候、兼康カ知行ノ処、備中ノ妹尾ト申所ハ、馬ノ草銅吉所ニテ候、申テ給ハラセ給ヘカシ、去五月ヨリ無甲斐命ヲ奉被助候ヘハ、実ニ御軍候ハ、真前懸テ命ヲ奉ラスル候ト申ス……

とある。法住寺合戦事も覚一本、鎌倉本に近く、百二十句本、屋代本と甚しく異なる詞章である。

以上、この巻八は鎌倉本に近い伝本である。覚一本と異なる所は、新帝御即位事に紀伊守範光の二首の歌なく、安徳天皇宇佐行幸事に、修理大夫経盛の歌、「恋シトヨ去年ノ今夜ノ終夜契シ人ノ思出ラレテ」の次に、左馬頭幸盛の歌、

君住ハ爰モ雲井ノ月ナレト猶恋シキハ都ナリケリ

の歌があり、左中将清経入水事に、

原田大夫種直ハ二千余騎ニテ後馳ニ参リケルカ、山賀兵藤次秀遠カ数千奇ニテ平家ノ御迎ニ参ル由聞シカハ種直秀遠以外ニ不快成ル間、悪カリナントテ、種直道ヨリ引返ス、芦屋津ト云処ヲ過サセ給ニモ、都ヨリ福原エ通シニ見馴シ里ノ名ナレハトテ、何ノ里ヨリモ馴敷、今更哀ヲ催ケリ

の語がある。覚一本なし。鎌倉本あり。

○巻九

東国勢上事同生済摺墨事に、

活食ヲハ蒲殿以下ノ人々参テ被申ケレ共不叶、梶原平三景時参テ、生食ヲ賜テ、今度源太冠者ニ宇治川渡サセ候ハハヤト申ハ、鎌倉殿、活食ハ自然ノ夏有ハ頼朝カ物具シテ可乗馬也、摺墨モ不劣馬也トテ、梶原ニハ摺墨ヲ社給リケレ、其後佐々木四郎高綱参テ、上洛可仕由ヲ申、鎌倉殿出合対面ノ、和殿ノ父、秀義ハ故左馬頭殿ニ奉付テ、保元平治兩度ノ合戦ニ致忠ヲ、中ニモ六条川原ニテ不惜命振舞給キ、其奉公ヲ思エハ、御辺モ疎ニ不思、者共幾ラモ有ツレ共不許、是ニ乗テ宇治川ノ真先セラレヨトテ、活食ヲ佐々木四郎ニ賜リ梶、佐々木此御馬ヲ給テ、御前ヲ罷立チ、余ノ嬉サニ打泣クンテ申ケルハ、身ハ為恩仕ヘ、命ハ依義輕ト申衷候、此御馬ヲ給作、宇治川ノ先陣人ニセラレテ候ナラハ、軍ニモ不可合、又兩タヒ鎌倉ニ下参マシク候、軍ニハ無子細合タリト被听召ハ、宇治河ノ先陣ハ為ツラント被思食候ヘト申切テ、御前ヲ立……

とある。傍線を附した所は覚一本と異なる所で、百二十句本に類する文である。屋代本は巻九が欠で比較出来ないのが残念である。鎌倉本もこれと同文である。これが八坂流乙類本に降ると、中院本に、

其のち佐々木四郎たかつな、いとま申にまいりたりけるに、ひやうゑのすけのたまひけるは、いけずきをばさしもの人々申されつるよ、かげすゑも申つれども、たばざりつるぞ、御へんのちゝ、ささきの源三秀義は、こさまのかみどのゝ、御いとをしみあさからざりき、されば平治のかつせんに御ともして、命をすてたりし



人なり、あひつぎて又御へんのほうこうしんべうなり、今度宇治川をば、此馬にのりてわたすべしとて、いけずきをこそたびてけれ、ささきしやうがいめんもく、これなりと悦で、まかり出けるが、いかゞおもひけん、たちかへりて申けるは、今度たかつな、宇治川にて、しゝたりときこしめされ候はゞ、人にさきをせられたりとおぼしめし候へ、いまだいきたりときこしめされ候はゞ、宇治川のせんちんをば、さだめてつかまつりつらんと、おぼしめされ候へと、申きりてぞいでにける

とありて、甲類本の内容をうけついでゐることが明らかである。次に宇治川合戦事に、

畠山、今日ノ軍神ニ祭レトテ、押双テ無須ト捕テ引落シ、頸捻切テ、本田次郎カ鞍ノ頸付ニソ付サセケル、九郎義経ヲ始テ二万五千余騎一度ニ打入テ渡シケル、馬人ニセカレテ左計早キ宇治河モ、下ハ瀬切テ浅カリケリ、雜人共モ馬ノ下手ニ取付々々渡リ臽、佐々木五郎、梶原平次、渋谷右馬允是三人ハ捨馬下々ヲ佩弓杖ヲ突テ行桁ヲソ渡リケル、東国勢此進ミケレハ、木曾殿ノ御方ニ宇治橋ヲ固メタル兵共暫支テ防共、坂東ノ大勢皆渡テ攻ケレハ……

とある。覚一本、鎌倉本には、傍線を附した所はなく、百二十句本にはある。次に樋口次郎降人出事にも、

兼光ハ都ニ登テ討死シテ、冥途ニテ君ノ御見参ニ入、今井四郎ヲモ今一度見ント思フト云ケレハ、听之、彼ニハ馬ノ腹帯ヲシムルト云テ四五十騎、此ニテハ甲ノ緒ヲシムル様ニテ二十騎、扣々

佐々木博士旧蔵平家物語について

落行程ニ、樋口か六百奇僅ニ廿奇計ニ成テ、鳥羽ノ南ノ門ヲソ入ニケル

とありて、覚一本、鎌倉本には傍線を附した所はなく、百二十句本にはある。一谷発向事にも、範頼義経に従ふ人々の名に、覚一本にはなく、百二十句本と同じき人名がある。

範頼に従ふ人に、

其子小笠原次郎長清、板垣三郎兼信、逸見四郎有義、伊沢五郎信光、山名次郎教義……(中略) 景家、畠山庄司重忠、同長野三郎重清、稻毛三郎重成……朝光、小野寺禪師太郎道綱、讃岐四郎大夫広綱、曾我太郎資信……盛直、塩谷五郎惟弘、勅使川原後三郎……

とあり、義経に従ふ人に、

安田三郎義貞、一条次郎忠頼……三浦介義澄、子息平六義村、佐原十郎義連、……原三郎清益、岡部六弥太忠純、猪俣小平六則綱、多々羅五郎義治、其子太郎光義、渡柳五郎清忠、別府小太郎清重、金子十郎家忠、同与一親範、河越太郎重房、源八広縄……とある。覚一本と順序の異なるものもある。範頼に畠山庄司重忠、長野三郎重清の従つたのは覚一本と異り、記憶の誤りであらう。

三草山敗北事に、

平家三千余奇ニテ西ノ山口ヲ固タルカ、先陣ハ自有用心スル様ナレ共、後陣ノ軍兵ハ、軍ハ定明日ノ事ニテソ有ン、軍ニ眠度ハ大事ノ者ソ、能寝テ明日ノ軍セヨトテ、或ハ甲ヲ枕ニシ或ハ鎧ノ袖簇ナントヲ枕ニシ、不知前後モ寝タリケリ、思モ不掛寅剋計ニ源

氏一万余騎三里ノ山ヲ打越テ、西ノ山口ヘ推寄セ、時ヲ同トソ作ケル、平家ノ兵共周章弓ヨ矢ヨ太刀ヨ刀ヨト云程ニ、源氏中ヲ嗟ト懸破テ通り、吾先ニト落行ヲ追懸々々散々ニ射ルとある。覚一本、鎌倉本と異り、百二十句本と略同文である。鶴越向事にも、

急キ物具シテ女房ヲハ返シ給ケリ、平家ノ方ニモ大手搦手ニ二分テ指向ラル、大手ノ大將軍ニハ、新中納言知盛、本三位中将重衡、其勢都合四万余奇、大手ノ城戸生田森ヲソ固メケル、搦手ノ大將軍ハ越前三位通盛、能登守度経、左馬頭幸盛、薩摩守忠度、三万余奇ニテ一谷ノ西ノ手ヘソ被向ケル、五日ノ暮程ニ源氏児屋野ヲ立テ……

とあり、覚一本、鎌倉本にはなく、百二十句本と同文である。一谷没落事にも、

是ヲ始テ、秩父、足利、三浦、鎌倉、党ニハ、猪俣、児玉、野井世、山口、小沢、横山、或ハ五百奇三百奇、或ハ百奇二百奇、色々ノ旗差拳テ名乗替々々々呼叫声、山ヲ響シ地ヲ動、馬ノ馳違音ハ如雷、敵ト引組テ落、互ニ差違テ死ル者モアリ、被取モ有、薄手負テ戦モ有、手負武者ヲハ肩ニ引掛、敵味方モ後ヘ引退モ有、分捕シテ出モ有、源平何モ隙有共見エサリケリ

とある。覚一本、鎌倉本と異る所である。百二十句本は、そののちちちぶ、あしかが、みうら、かまくら、たうには、こだま、ゐのまた、のゐよ、山ぐち、をざは、よこ山、あるひは五百奇、あるひは百き二百き、いろくのはたさしあげて、なのりか

へくたゝかひけり、源平のつはものみだれあひて、いらはたあかはたあひまじゑ、りやうばうおめきさけぶこゑ、山をひゞかし、むまのはせちがふおとはいかづちのごとし、かたきとひつくんでおち、たがひにさしちがへてしぬるもあり、くびをとるもあり、とらるゝもあり、うすでをふてたゝかふもあり、てをひむしやをばかたにかけて、かたきもみかたもうしろへひきのき、ぶんどりしていづるもあり、源平いづれもひまあり共見えざりけり

とあつて、本書に近く、本書は鎌倉本と百二十句本の中間に位する本文と認められよう。

敦盛討死事にも、  
勝軍ノ負ル事ハ世モ非、奉助ト思ヒ後ヲ急ト見ケレハ……偕シモ可有事ナラネハ、泣々御頸ヲソ搔テケル、鎧直垂ヲ取テ……  
とあり、鎌倉本に同じく、覚一本に比して誤脱がある。

以上によりて本書は、鎌倉本に近く、百二十句本よりは前出と認められよう。とすれば鎌倉本は覚一本に近い本文であるによつて、覚一本より鎌倉本へと漸次流動し、本書となり、百二十句本への成立に至つたと推定しても誤りが無いであらう。従つて巻八も巻九と同様に推定してよい。

# ○巻十

巻頭、於一谷被討平氏頸大地被渡事に、

寿永三年二月十二日、去七日一谷ニテ被討タル平氏頸共京ヘ入、少モ平家ニムスホ、レタル人々ハ、吾方様ニ今日如何ナル事ヲカ聞シスラントテ、歎人々多カリケリ、中ニモ大覚寺ニ隠レ居玉ヘ

ル小松三位中将北方へ、西国へ討手ノ向ト聞度毎ニ、今度ノ軍ニ、三位中将矢ニ当テヤ死ンスラン、イカナル目ニカ合玉ハンスラント、静心無思ハレケル所ニ、平家ハ一谷ト云処ニテ残少ク亡、三位中将ト云公卿一人生虜ニセラレテ上リ玉フト聞ヘシカハ、北方、此人ハ離シ物ヲトソ泣レケル……

とある。これは覚一本、鎌倉本と甚しく異り、百二十句本と同文である。この巻は、全般的には百二十句本と同一の本文を有すると認められる。

重衡大地被渡事同三種神器事屋嶋被仰下事に、

法皇廳院宣ヲ被下梟、院宣ノ御使ニハ御壺召繼華方ヲ被下、三位中将ノ使ニハ古召仕平三左衛門尉重国ト云侍ヲ添テ被下ケリとあり、△の所に、百二十句本には院宣の状文が述べられる。本書には院宣の状文なし。次に、

二位殿モ力及ハセ不給、偕院宣ヲ被開

(六行空白)

其後平大納言時忠院宣ノ御使華方ヲ召寄、汝カ多ノ浪路ヲ凌テ御使シタルニ……

とありて、ここに院宣の文を入れる予定であつたものか。請文は、

去十六日院宣同廿三日讃州屋嶋到来、謹而以披閱仕処、抑頼朝者、且君如知食候既可被行死罪、故入道相国慈悲余、申有流罪之処也、而忘其恩猥連凶党、通盛卿以下当家教輩、……三種神宝可放給玉体、曩祖平將軍貞盛相馬小次郎將門追討以来、代々奉守禁闕朝家、亡父数度奉公不思食忘……

佐々木博士旧藏平家物語について

とあつて、覚一本、鎌倉本、百二十句本とも異なる所がある。本書は簡略である。重衡受戒の条は、百二十句本と同文であるが、内裏女房の条は、

土肥次郎現モ女房ノ御方ヘノ御(文)ニテ候ハ、不苦トテ免テケリ、政時はヲ取テ宿所ニ帰り日ヲ暮シ、誰彼時ニ内裏ヘ参リ、禁中人定程ニ、此女房ノ御坐ケル局ノ辺ニイミ聞程ニ、折節是ニモ三位中将ノ事カ宣出メ、口惜ヤ人多ケレ、三位中将ノ生虜ニセラレテ上リタンナル無慙サヨ、奈良ヲ滅シタル罪深クテ、生々世々可浮トモ不覚常ハシカ誠ニ其罪ノ酬ヤラント、雨々トソ被泣ケル、政時はヲ聞テ、糸惜ヤ是ニモ同心ニテ御坐ケルヨト嬉テ、御局ノ妻戸ヲホトノト擲ケレハ、内ヨリ誰ト問玉フ、前三位中将殿ノ御使ニ参候シ政時社参テ候ヘ、……

とあり、この内裏女房の章は屋代本と殆ど同文である。前後が百二十句本と同じく、この章が屋代本の本文と一致するのは、屋代本の如き本文の成立關係を明示するものではなからうか。重衡鎌倉被召下事には、重衡の、「故郷モ恋クモナシ旅ノ空都モ終ノ栖ナラネハ」の次に脱文があり、

都ヲ出テ日数ヲ経レハ弥生モ半過ナントス

に続く。又次の、頼朝重衡対面并千寿前事に、

朋ル二日ノ午尅計ニ頼朝ヨリ御使有テ、梶原平三景時ニ、本三位中将殿俱足シ奉レト有シカハ、景時ニ被具張輿ニ乗テ、兵衛佐ノ亭ニ向給フ、作事半ナレハ刈屋ノ様ナル寢殿ニ居奉ル、良有テ頼朝出合、二間ヲ隔テ中将殿ニ対面シ玉イ、景時ヲ御使ニテ被申ケ

ルハ、抑君ノ御憤ヲ休メ進セ、雪会稽ノ恥ト存立シヨリ、平家ヲ奉滅ラン事ハ、案ノ内ニ候キ、去共親リ加様ニ見参ニ可入トハ不思寄候、係ル定テハ屋嶋ノ大臣殿ノ見参ニモ今ハ可入ト社存候ヘ、先大仏殿炎上ノ事ハ、故太政入道殿ノ仰候カ、亦臨時御計候カ、無量罪業ト社存候ヘト宣被遣ル、三位中将取去ヌ鉢ニテ、南都炎上ノ事、故相国禅門ノ儀ニテモ不候、亦時ニ合テ某カ愚意ノ発趣ニモ不候、衆徒ノ惡行殊ナルニ依テ、暫可治ト云被宣下間、時ノ大将ニ被撰向ヒ候キ、兵火ノ余烟風吹掛テ、伽藍ノ滅亡併時刻到来ノ次第也、一門ノ運尽テ都ヲ出シ上ハ、骸ヲハ山野ニモ曝シ、江海ニモ可沈ト社存候シカ、是マテ下候ハントハ不依思、但殷王ハ捕夏代、文王ハ捕牖里、是弓箭取身ノ敵ノ手ニ懸テ滅サル、事、昔ヨリ有事也、重衡一人ノ不恥、サレトモ先世ノ宿業社口惜候ヘ、保元平治ヨリ当家ノ門葉官位奉禄身ニ余、辱モ戚里ノ臣トシ、四海不靡草木ヤ候シ、源氏ハ近年亡果テ無カ如ナリシ事、皆人知レル事也、只芳恩ニハ疾可被刎首ト計宣テ、其後ハ物モ不宣

とある。傍線を附した所は覚一本と異なる所である。鎌倉本は覚一本に同じく、百二十句本は本書とも異なる。然るに屋代本は、

兵衛佐三位中将ニ対面シ給テ、会稽ノ恥ヲ雪メ、君ノ御憤ヲ休奉ラント存候シカハ、平家ヲ滅奉ン事ハ案ノ内ニ候キ、サレトモ親リニカ様ニ可入見参トハ不思寄、カ、レハ、定テ屋嶋ノ大臣殿ノ見参ニモ今ハ入ツトコソ覚エ候ヘ、抑奈良ヲ滅給ヘシ事ハ、故太政入道殿ノ御計ヒ候カ、又時ニ臨ミタリケル事候カ、無量罪業ニ

テコソ候ラメト宣ヘハ、三位中将宣ケルハ、一門ノ運尽テ既ニ都ヲ落シ上ハ、骸ヲハ山野ニ曝シ、江海ニモ可沈トコソ存セシカト、是マテ下ルヘシトハ思モヨラス、殷王ハ捕邑代、文王ハ捕牖里トテ、弓矢取ル身ノ敵ノ手ニ捕レテ滅サル、事、昔ヨリ皆有事也、重衡一人ニ限ラネハ、今更可恥ニハアラネトモ、先世ノ宿業コソ口惜ク候ヘ、只芳恩ニハ疾々可被刎首ト斗宣テ其後ハ物ヲモ不宣

とある。この文の前後は百二十句本の本文に近いものである。この屋代本の本文は、本書よりの流動と認むべきではなからうか。屋代本を最古態と考察する渥美博士や山下宏明氏の説明はこの条を何と解するであらうか。維盛高野山并熊野参詣同入水事に、百二十句本には、建礼門院の雑仕横笛を江口長者の娘云々の一節があるが、覚一本、鎌倉本、本書にはなく、

如何ナル道心者も心弱可成ツ、聴テ心モ乱ヌヘウ覚エケレハ、急キ人ヲ出シテ、全ク是ニハ去事ナシ、門違ニテソ候ラントテ、心勁モ終ニ遇テソ還シケル、横笛恨シク思ヘ共不及力立帰ル、聴テ替様ヲタル由聞テ、滝口入道一首ノ調ヲソ送リケル

とあるのも、覚一本や百二十句本と異なる所である。これも屋代本に同じく、屋代本は本書を基として成立したものと認むべきあらう。次に、

故大臣殿（御痛ノ時）此世ノ事ヲハ皆思食捨テ、一事モ仰ノ候ハサリシニ、重景ヲ近ク召テ、汝ハ少将殿ノ御方ニ候テ、相構テ能々宮仕申セ、御心ニハシ違ナ、ント社、御最後マテモ仰承テ候シ

カ、君ノ神ニモ仏ニモ成セ給テ後、楽榮ヘ世ニ有ハ、千年ノ齡ノ可延歟、縱持万年、終ニハヲハリノ可無乎、過之タル善知識何事カ可候トテ、本鳥切テ、滝口入道ニ刺セテ威ヲソ持ケル……、都ヘ上レトコソ思シカ共、屋嶋ヘ渡レト思ソ、其故ハ都ヘ行テ、現世ニ無者ト申サハ、聽テ様ヲ替ナンスル事モ不便也、少キ者共カ歎カンスル事モ無慙也、矢嶋ニ殘兄弟ノ人々待共カ無覺束思ハンモ心苦シ、抑唐革ノ鎧、小鳥ノ太刀ハ……

去程ニ岩田河ヲモ渡給ヘハ、此河ノ流一度渡ル者ハ、惡業煩惱無始ノ罪障ノ消ナル物ヲト憑モシク被思ケリ、漸々サシ玉ヘハ、日数経レハ本宮ニ懸リ着テ、先証誠殿ノ御前ニ参リ……

とあり、覺一本とも異り、百二十句本にも異り、全般的には百二十句本の本文であるが、本書は簡略となつてゐる。然も、屋代本の本文と一致するのである。かくしてこの巻十は、百二十句本が簡略化されて屋代本の本文の成立したことを示す所が少くない。

### ○巻十一

巻頭、範頼義経院参事に、

海ハ櫓櫓ノ堪シ限ハ責スル也、是ハ無益、命ソ惜キ、妻子ソ悲キト思ハン人々ハ、急キ従是鎌倉ヘ可被下トソ宣ヒケル、屋嶋ニハ隙行駒ノ為足速……東国ノ兵共攻来ト聞エシカハ、男女ノ公達相集□王□計也

とあり、次に続いて、

範頼義経南方ヘ首途并義経景時逆櫓論事

同二月十三日都ハ廿二社ノ官幣有、是ハ主上并三種神器无事故都

佐々木博士旧蔵平家物語について

へ販入給ヘトノ御祈念ノ為トソ覺エケル、同十四日三河守範頼為平家追討七百余艘ノ舟ニ乗テ自摂津国神崎山陽道ヘ発向ス、九郎判官義経二百余艘ノ船ニテ、同国東川自渡部南海道ヘ趣ク……

とあり、傍線を附した如く覺一本と甚しく異なる所がある。鎌倉本、百二十句本と同文である。従つて比較も八坂流本に限られよう。

屋嶋軍事に、

伊勢三郎、舌ノ根和カナレハトテ、汝等左様ノ事ナ申ソ、知ヌ事カ、砥並山ノ軍ニ辛キ命ヲ生テ乞食ヲノ、京ヘ登リケルト社听、其ヲハ世モ争カハシ物ヲト申ケレハ、盛繼、自幼少君ノ御恩ニ飽満テ、何ノ不足ニ乞食ヲハスヘキ、和君ハ亦不知事カ鈴鹿山ノ山賊シテ妻子ヲ養ケルト聞、夫ヲハ世モ諍ハシ物ヲト申ケレハ、判官ノ前ニ扣タル金子ノ十郎听之、雜言無益ニ候、吾モ人モロヲ動キ辭事ヲ言ハンニハ、夜明日暮共劣ルマシ、去年ノ春一谷ニテ……

とある。傍線を付した所が覺一本と異なる処である。鎌倉本と同文である。百二十句本は、簡略で、

いせの三郎、なんぢはとなみ山のいくさにからきいのちをいきで、こつじきの身となり、都へのぼりしはいかにと申、もりつぐ、なんぢもすぐか山の山がつよと申けり、かねこの十郎、ざうごんたがひにゑきなし、申さばいづれかをとるべき、こぞのはる一のたににて……

とある。住吉神鏑并義経景時口論事に、

判官憎イ奴ソトテ太刀ニ手ヲ掛テ立拳ラントシ給ヘハ、梶原少モ

騷カス、太刀ニ手懸テ刷処、嫡子源太、次男平次景高、同三郎景茂、親子主従十四五人、打物ノ翰ヲ馳テ、父ト一所ニ寄合タリ、判官ノ御気色ヲ見奉テ、奥州ノ佐藤四郎兵衛、伊勢三郎、片岡太郎、源八兵衛、江田源三、熊井太郎、武蔵房弁慶ナント、云一人当千ノ兵、打物ノ翰ヲ馳テ梶原ヲ真中ニ取込テ、我討捕ントソ進ミケル、去共判官ニハ三浦介取付奉、梶原ニハ杜井次郎願付、兩人手ヲ磨テ判官ニ申ケルハ……

これは覚一本に近い。鎌倉本は、  
太刀ニ手ヲ懸刷フ処ニ、三浦介土肥次郎ムスト中ニ隔タリ奉ル、土肥次郎、梶原ニムスト取付、三浦介判官ニ申ケルハ……

とありて簡略である。百二十句本は、鎌倉本と同じ、これは全般的に本書は鎌倉本に近い本文であるが、鎌倉本と異りて、覚一本に近い所が若干ある。安徳天皇御入水事も、覚一本に近いが、鎌倉本には、

先帝今年八歳ニ成セ給カ、御歳ノ程ヨリモ遙ニヲトナシク御グシ黒クユウ／＼ト御背過サセ給ヘリ、アキレサセ給ヘル御様ニテ、此ハ又何チヘソヤ、尼セト被仰ケル、御詞ノ未終ニ、二位殿、是ハ西方淨土トテ、海ニソ沈ミ給ケル、無常ノ春風花ノ姿ヲサソヒ奉リ……

とありて、覚一本より簡略であり、百二十句本と同一である。劔巻、鏡巻も鎌倉本、屋代本と同文である。新大納言時忠義経取筆事に、

平大納言時忠卿モ、九郎判官ノ宿所近フソ在ケル、此ク代ノ成上ハ、兎モ角モト可被思ニ、猶命カ惜ク被思ケン、子息讃岐中将時実ヲ呼テ宣ケルハ、散スマシキ文共ヲアマタ判官ニ被取タルソト

ヨ、此文共関東ニ披見セハ、人モ多ク損シナンス、吾身モ亦生ケラルマシキソト宣ハ、中将被申ケルハ、九郎判官ハ情深キ男ニテ、女房ナトノ申訴テ歎事ハ、如何ナル大事ヲモモテ不放トコソ承リ候ヘ、姫君余多在候ヘハ、何カ苦シク候ヘキ、一人見セサセ給候テ、親ク成テ、此由ヲ可被仰モヤ候ラント被申ケレハ……

鎌倉本に殆ど同文である。次に建礼門院御出家事、副將軍義宗事、前内大臣宗盛父子関東下向并親子被刎首事、重衡被渡南都被誅木津事がある。他の八坂流諸本は、副將軍被斬事を以て卷十一を終るのであるが、本書のみがその分割を異にする。従つて覚一本と同じく卷十二の巻頭は大地震事を以てはじまるのである。

前内大臣宗盛父子関東下向并親子被刎首事に、

粟田口四宮川原松坂ヲモ打過々々、逢坂山越行ハ、都ハ跡ニ隔リヌ、関清水ニテ駒ヲ蹙テ、

都ヲハ今日ヲ限ノセキ水ニ暫名残ノ影ヤ移サン

昔ハ名而已听シ海道ノ宿々名所々々見玉イテ、日教経レハ駿河国

浮嶋原ニソ懸結、是ハ浮嶋原ト申セハ、大臣殿、

塩路ヨリ終ヌ思ヒラスルカナル名ハ浮嶋ニ身ヲハ富士ノ根

右衛門督清宗、

儂ナレヤ思ヒニモユル富士ノ根ノ空キ天ノ烟計ハ

去程ニ人々鎌倉ヘ入給フ、義経ハ近年西国ニテノ忠功異于他ル間、殊賞翫有、西国ノ合戦ノ様ヲモ直ニ尋問玉ハント思儲テ被下ケルニ、源二位当時ハ勞事有トテ対面モシ玉ハス、判官左杜恨敷被思ケメ、梶原平三景時ニ仰テ、大臣殿父子ヲハ請取ラル……

とあり、鎌倉本、百二十句本と同一の文の中に、傍線を附した如く、  
覚一本の如き一方流の本文を補入してゐる。最後の重衡被渡南都被誅  
木津事も、百二十句本に同文である。鎌倉本は百二十句本に類する  
が、その一部に一方流の文を補入してゐる。

以上によつて、この巻十一は、鎌倉本に近く、百二十句本に類する  
章があり、鎌倉本よりは後出で、百二十句本よりは前出の本文と認む  
べきであらうか。

## ○巻十二

巻頭は大地震事で、覚一本と同一であるが、本文は、鎌倉本に類  
し、簡略された所があり、

世ノ失ナント云事ハ有聲ニ昨日今日トハ不思ッル物ヲ、是ハ如何  
ニトテ喚叫、是ヲ聞テ、雅者泣悲ム、文徳天皇ノ御宇ニ……開闢  
ヨリ以降懸ル事可有トモ不覚、平家ノ怨靈ニテ世ヲ失ヘシトソ人  
々申合レケル

とあり、次に、覚一本になき、

九郎判官任伊予守改義経成義頭事并源氏教輩受領事  
がある。鎌倉本に同じ。次に、義朝首鎌倉下事（紺搔沙汰）がある。

鎌倉本にはなし、次に平家生捕国々流罪事がある。覚一本に類し、鎌  
倉本にも略同文といへよう。時忠配流の後、鎌倉本は、

日数経レハ能登国ニソ着給、彼配所ハ浦近キ所ナリケレハ、常ハ  
浪路遙ニ遠見シテ、慰給ケルニ、岩ノ上ニ松ノ有ケルカ根アラハ  
ニテ浪ニ洗レケルヲ見給テ、大納言此フソ宣ケル

白浪ノ打驚ス岩ノ上ニネイラテ松ノ幾世経ヌラム

佐々木博士旧蔵平家物語について

加様ニ詠明シ暮シ給テ、彼配所ニテ大納言終ニ墓無成給ヒケル社  
哀ナレ

とあるが、覚一本にはなく、屋代本はこれに同じく、本書は、「白浪  
ノ打驚ス」の歌までは略同文で、次に、

常ニハ哥詠詩作、鄙ノ栖モ中々ニ都ニ替有様ヲヨスカト慰ミ給  
フ、昔平相国清盛天下ノ政ヲ此卿ニ被仰合ケレハ、諸事心ニ任  
ニ、家内楽テ肩ヲ双ル人モナシ、懸ル目出度事共思出フニモ、今  
一入ノ悲ミニ、袂ノ千隙モナシ、此ノ彼配所ニテ終ニ墓無成玉フ  
とある。本書の増補である。覚一本にはない。

次に、為伊与守義頭討手土佐房昌俊上洛事がある。

去程ニ伊与守義頭ハ大名十人被属ケレトモ……京都ノ騒共成ナン  
トテ、召土佐房昌俊ヲ、和僧上テ物詣スル様ニテ……

とあり、鎌倉本は、この前に建礼門院の大原入御の事がある。覚一本  
とかなりの差異があるが、鎌倉本に近い本文である。

御詞ニ申セト候シハ、当時洛ニ別ノ子細勿糸、偕御渡候故ト覚  
候、相構テ克々守護シ玉ヘト仰有テ候ト申ケレハ、義頭、ヨモサ  
ハ不有、討義経ヲ上タル使也、大名共指上セハ宇治勢多橋ヲ引、  
京都ノ騒共ナランスラン、和僧上テ付テ打トソ被仰付タルラント  
宣ハ、昌俊争カ去ル御事可候、聊依有宿願熊野ヘ参詣ノ為ニ罷上  
テ候ト申ケレハ……

とある。覚一本に近い詞章である。鎌倉本とも若干の差異はあるが、  
略同文の所が多い。次に、同堀河宿所夜討事付昌俊被誅事に、

和僧命惜ハ還鎌倉ハ如何、昌俊、不正モ御錠候者哉、殿程ノ將軍

ヲ奉討上タル物カ、不討進ノ還シ事不覚候、其上鎌倉殿ノ御註ニハ、法師ハ幾モアレ共己ソ堪エンスル者ヨト仰ノ有シ時、命ヲ猷頼朝、爭取返シ申ヘキ、御恩ニハ疾々被刎首候ヘヨト申ケレハ：

とある。以下、

参川守被誅事

伊与守義頭都没落

為時政上洛平家子孫探求誅戮事

同小松六代御前事

新宮十郎藏人信多三郎先生奉討事

小松六代出家事

湯浅城軍事并土佐守宗実事

鎌倉殿初上洛加階事并法皇崩御事

大仏供養并薩摩中務悪七兵衛事

伊賀大夫知忠討死事

越中次郎兵衛事

文覚上人隠岐国配流事

小松三位禅師被伐事

とある。此等の記事は、鎌倉本は覚一本に近く、本書はややそれよりは差の多い詞章である。傍線を附した章は覚一本にはない章である。又鎌倉本と本書とが一致し、覚一本と異なる所も多い。例へば、小松六代出家事に、

参熊野玉イケリ、本宮証誠殿ノ御前ニテ、祖父ノ大臣命ヲ召テ後

世ヲ扶玉ヘト被申ケル事、父三位中将ノ事マテ思召出テ哀也、夫ヨリ詣新宮ヘ、那智ヘソ参リ玉イケル、浜ノ宮ノ前ニテ父ノ渡給ケル山成ノ嶋ヲ見渡テ……

とあり、傍線を附した所は、覚一本になく、鎌倉本と本書とにある所である。法皇崩御事に、

同三年三月十三日、法皇崩御成ヌ、普天皆介クレ卒土悉露滋シ、

往生極楽ハ朝夕ノ御望也ケレハ、臨終正念違セ不給、瑜伽三密ノ

鈴ノ音ハ其夜ヲ限リ一乗暗誦ノ御声此晝ニ絶ニキ

とある。六代勝事記による文である。これも鎌倉本に類する所である。かく見ると鎌倉本との関係も極めて密である。最後に、

建礼門院大原御隠遁并法皇寂光院御幸夏

がある。これは、覚一本の灌頂巻の、建礼門院の大地震にあひ奉る事以下に相当する所である。建礼門院の吉田入御、御出家の事は、他の八坂流本の如く、巻十一中に収めてゐる。この巻十二の文は、鎌倉本の文と極めて近いもので、覚一本の文とはかなりの差がある。従つて、覚一本の灌頂巻をここに附したものと認めることは無理で、鎌倉本の如き文をここに集めたと認めるのが自然である。例へば、

仏道修行ノ志アラハ、来世ノ受楽且ハ想像社ユ、シケレ、去ニテモ今更可驚ニ非ネ共、此御有様ヲ奉見テ、無為方社候ヘトテ、御泪ヲ流サセ玉ヘハ、供奉ノ公卿殿上人モ皆袖ヲソヌラサレケル、女院申サセ玉イケルハ、係ル身ニ成侍テモ、親ニ六道ヲ見シカハ、悲ノ中ノ悦ト社思侍ヘト仰ケレハ、法皇異国ノ玄牝三藏ハ悟ノ内ニ六道ヲ見、本朝ノ日藏上人ハ藏王権現ノ力ニテ六道ヲ見タ



リト社承レ、正ク女性之御身ニテ六道ヲ見玉ハ、ン事、不審ク社候  
ヘ、女院申サセ給ケルハ、勅詔ハ去事ニテ候ヘ共、地獄非地獄、

我心ニ有地獄、西方非西方、吾心ニ有西方ト侍ハ、偕ハ准此世ニ  
六道ノ様ヲ申侍ヘシ、抑吾身為平相国ノ娘ト、蒙女御宣旨……

とある。これも傍線を附した所は覚一本になく、鎌倉本と本書との一  
致する所であり、又傍点を附した所は、覚一本と記述の順序の異なる  
所である。この様な本文現象によつてこれを灌頂卷の楷梯本と認める  
ことは出来ず、灌頂卷の影響をうけて、最後に建礼門院の記事を集め  
たものと推定すべきであらう。

以上で、佐々木信綱博士旧蔵本の特質を解明して来たのであるが、  
その結論としては、鎌倉本に近似した伝本であり、又百二十句本と同  
類の本文を有し、又一部では屋代本とも共通な本文を有する章があ  
る。覚一本と鎌倉本の関係は、徐々に覚一本の本文が改訂、又は増補  
せられたものと認められ、本書は更にその改補が進展したと認められ  
る所があるによつて、鎌倉本よりは後出と認むべきであり、百二十句  
本の如き八坂流本文の成立の基礎となつたものといふべきであらう。  
他の平松家本享禄本などとも更に連関して述べるべきであるが、煩雑  
にすぎるので、屋代本との関係も省略したのである。以上の考察によ  
り岩波古典大系の解説の如き、屋代本を最古態とする説は再検討すべ  
きである。

(五五・九・一〇)